

## 冬の直まき 実りに期待 岩手大生ら コメ栽培研究

滝沢

初冬にコメの種もみを直接まく栽培技術の確立に取り組む、岩手大農学部の下野裕之教授（作物学）と学生は15日、滝沢市巣子の同学部附属滝沢農場で、2023年産米の種をまいた。6年にわたる研究の集大成で実用化の道筋をつける。

学生ら20人で、保管条件や塗布した薬剤の種類などが異なる147通りの種をまいた。20年秋から研究に取り組む同大大学院1年の早坂和希さん（23）は「一から栽培法を探っており、種をまくたびに課題

が出てくる。実用化に向け参考になるデータが取れるよう、平年並みの天候で推移してほしい」と願った。

冬の直まきは、労働力不足に悩む農家の負担軽減や規模拡大が期待される。研究は18年度に始まり、2期目（21～23年度）。23年秋収穫分は、21年産の種での出芽率向上や病害虫防除の体系化と生産マニュアル確立などを目標に掲げる。

研究は県内外の13機関、東北6県と北海道、新潟県の14生産者と連携して行っている。



まいた種もみに土をかぶせる学生

※岩手日報 令和4年11月17日付/17面

※この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています。